■エッセイ■

山下鉄之輔と佐藤敬両画伯のこと

■佐藤瑠威■

美学美術史学科（現芸術文化学科）は、故佐藤義詮学長の強い希望・意志によって創設されたと聞いている。史学科を除く他の既設の国文学科や英文学科も定員確保に苦労していた当時、美学美術史学科を作ることには学内にも異論や危惧の念があったであろうことは容易に想像される。それでもこの学科を作ろうとした理由は何であったのだろうか。大学事務部長をされていた佐藤信夫氏によれば、哲学系の学科を作りたいという佐藤学長の希望が出発点にあり美学の学科を作ろうとしたが、同時に実技教育も行って教職資格なども取れるようにするという構想になって、美学美術史学科設立になったという。伝統的に文学部教育の柱とされていたのは、いわゆる文哲史、すなわち文学・哲学・歴史学であったから、佐藤学長もこれらの柱をなす学科を揃えたいという強い願望を持っていたのであろう。

ただ当時の詳しい経緯を知らないので想像の話しになるが、普通の哲学科ではなくて美学科というかなり特殊な学科を作ろうとしたことには、佐藤学長の美や芸術に対する強い想いがあったからと思えてならない。佐藤が学んだ文化学院の創立者の西村伊作は絵画や建築や陶芸の創作を行う芸術家でもあり、芸術教育を重視した人であったという（寺崎昌男編『近代日本における知の配分と国民統合』〔第一法規出版〕所収の平沢信康著「文化学院における教育改革の試み」を参照）。文化学院で受けた芸術教育の経験と、そして郷里の大分に帰ってからの多数のすぐれた芸術家との長期にわたる深い交友が、別府大学で芸術教育を実践したいという想いにつながっていったのではないかとも考えられるのである。

佐藤学長は自ら創作活動を行うことはなかったが、絵画を初めさまざまな美術に強い関心を持った人であり、芸術家との交友関係も多かった。画家ではとりわけ山下鉄之輔と佐藤敬と親しい友人関係にあった。山下鉄之輔は、旧制大分中学の教員をし、佐藤敬はその教え子にあたるようである。山下は大分を去った後、戦後も何度か大分にやってきて、佐藤学長の家にかなりの期間滞在していたと記憶している。佐藤は社交的な人であり、自宅にやってくる友人も多かったが、自宅に長期間滞在するほど親しい友人は他にいなかったと思う。親しいといっても遊び友達のような関係では全くなく、純粋に芸術に対する関心を通しての交わりであったと思う。佐藤にとって山下は、佐藤が強い関心を持つ芸術特に絵画の世界の大先輩、あるいは絵画を鑑

賞する上での師のような存在であったのではないかと思われる。あるとき、佐藤が山下に先生はどの画家が一番お好きですかと尋ね、山下が私はやっぱりセザンヌですねと答えたことを記憶している。佐藤の話し方には他の人との会話では見られぬ敬意のこもった親しさがあった。佐藤の学問と芸術を重視し、すぐれた学者や芸術家に敬意をもって接する態度は一貫していたが、佐藤が立場上接した学内外の多くの学者・芸術家の中でも、山下に対するときの態度ほど混じりけのない敬意や親愛の念を見せたことは他になかったように思う。

佐藤敬は画家としてはおそらく山下よりもはるかに有名な人であったと思うが、佐藤学長とはほとんど同年輩の人であり、佐藤学長も親しい友人に対するような態度で接していた。佐藤敬は戦後はほとんどパリで創作活動を行っていたから、戦後二人が交際する機会は余り多くはなかったと思う。それでも二人が会うときは、非常に親しい友人同士のような打ち解けた雰囲気が感じられた。私がパリに留学していた時、佐藤学長がパリにやってきて佐藤敬の自宅を訪ねたことがあった。その自宅にはいろんな絵や置き物が飾られてあった。佐藤学長が小さな彫像に目を留めてそれは誰の作品かを尋ねたら、佐藤敬がそれはピカソだと答えたことを記憶している。我々にとっては芸術史上というよりも歴史上の偉人であるピカソのことをまるで近くに住む友人か同じ業界の知人のように語ることに驚かされたものである。佐藤敬には、数多くのすぐれた芸術家がいるパリで創作活動を行っている画家ならでのたたずまい、知性や品格や迫力がにじみでる個性があり、その際立って小柄な体から強烈なオーラが発せられているように感じたものである。

佐藤学長は仕事柄多くの学者や芸術家の友人がいたが、山下と佐藤敬はそのなかでも佐藤学長が最も親しく接していた人たちであったと思う。このようなすぐれた芸術家・芸術教育者との長期にわたる深い交友が、別府大学に芸術教育を行う学科を作りたいという想いとなっていったのではないかと想像するのである。

（別府大学教授）